

トルストイの経済思想

竹内謙二

プレリユード

モスコウ退却

ヴィトル・ユゴー作（竹内訳）

雪が降る。ついに、征服で敗れる日がきた。初めて、鷲の軍旗が頭を下げた。

暗い日がつづき、皇帝は引上げる。足は進まず、煙を上げて、燃えるモスコウを後にして。

雪が降る。厳しい冬空から、雪崩の如く落ちてくる。真白の大平原、真白の大平原。

隊長はどこか、軍旗はいずこ、もう全く分からぬ。

昨日は大陸軍、今日は人の一と群れ。はや軍の両翼も本隊も、区別がない。

雪が降る。傷兵は死馬の腹かげに宿る。

荒涼たる野営の周りに、凍えたラッパ手の歩哨が見える。立っている者も、鞍にまたがり無言の者も、氷の花で真白だ。石のような唇を銅のラッパあかがねに押しあてて。

トルストイの経済思想

銃砲彈散彈が、真白な雪の粉に混つて、降りそそぐ。近衛兵は、驚き、身を震わせ、深い思いに沈んで歩く。半白のヒゲに氷がさがる。

雪が降る、雪が降る、来る日も来る夜も。寒い北風がヒュヒュウなる。そこはどことも知れぬ場所、霜を踏んで、食うにパンなく、はくに靴なく、はだしで行く。

もはや生きた人間ではない、軍人ではない。濃霧の中をさまよう夢である、神祕である。暗黒の天を行く、蔭の行列である。

広大無辺の、見るも恐ろしい、人外の荒野。四方に、無言の復讐者が現われた。

天は厚い雪をもて、音もなく、この大軍のために、広大な屍布を作つて、かぶせた。

誰一人、死ぬな、と感じない者はない。誰も自分一人ぼっちである。

この死の谷から、いつかは、抜け出せるのか。

敵はザーと北風。北風の方がこわい。

大砲をすて、砲架を焼いて、暖をとつた。

寝た者は死ぬぞ。陰惨にして雑然たる人の群れ。

彼らは逃げる。荒野は行軍を食い尽した。

屍の山が雪を高く持ち上げた。そこに、連隊の眠っているのが見える。

『戦争と平和』が映画化され、トルストイは、常に、新鮮であります。作者のモスクウ退却戦に因んで、ユゴーの

詩を訳し、今日のお話のブレリユードとします。

一九五一年に死んだ『狭き門』『にせ金造り』の作者、ノーベル賞のアンドレ・ジードの伯父、シャル・ジード（一八四七—一九三三）は、パリ大学教授で、その『経済原論』は、世界で最も普及した教科書で、三十ヶ国語に訳されました。また好著『経済学史』も有名です。私は、一九二八年に、パリで訪ね、日本料理に招いたこともあります。一八九四年——エンゲルスの死、私の生れた明治二八年の一年前——ジードの四七才の時、当時、トルストイの名がフランスでは殆んど知られていなかった頃、ジードは、トルストイの経済思想について講演し、その原稿を、ある雑誌にのせ、それを、トルストイに送って見せました。

トルストイからジードへ返事がきましたが、この返事の手紙は、モスコウのトルストイ記念陳列館から乞われて、そこへ、寄贈しました。この返事の要旨は、「ボンダレフの本への批判は正しいと思う。私自身のドクトリンに関する批判には沈黙を守る。けだし、誰でも人は、同時に、当事者でありかつ裁判官たりえないから」と。

ジードの八二才の時、既にトルストイの名は全世界で知らぬ者なく、その生誕百年祭に際し、右の講演の原稿を、再び別の雑誌、実は自分の主宰する *Revue Des Etudes Coopératives* にのせ、それを、私の帰朝後、一九二九年（昭和四年）に送ってくれました。ジードの最初の講演後今日で七四年目。トルストイの作品が近頃盛んに邦訳出版されて、トルストイは永遠に新しいですから、このアトモスフェールのなかで、彼の経済思想を御紹介しようと思ったのです。凡そ四十年前のジード教授の好意に報いるを、喜びとします。以下は本文です。

ずっと前に、モスコウのある邸宅に、『靴直し——トルストイ』という看板がかかった。これが、実は、何と伯爵

レオン・トルストイ、大地主、『戦争と平和』『アンナ・カレーニナ』の有名な作者であつた。皇帝は、これを見て、大いに氣を悪くし、看板を取り下げようと命じた由。

伯爵トルストイは、看板を取り下げた代りに、ツーラ県のわが地所に引退して、六千ヘクタール（東大敷地の二百倍位）の大所有地に住い、トルストイ家に働く大勢の百姓に伍して、暮した。ロシア農民（ムジーク）のだぶだぶした仕事着をつけ、刈入れ人の刈取鎌又は羊飼のむちを持った写真が、よく見られる。これは、しかし、体操のための労働でもなく、頭を使った後の氣晴しのための労働でもなく、又グラッドストーンの様に、彼の田舎の農園で、木を切つた仕事に似たものでもない。トルストイにとっては、この労働は、生活のためと人間の義務とからするのであつた。

肉體労働、手足労働は、彼に於ては、彼が崇高と信ずる彼の經濟的および社会的・理論としっかり結びついたものであり、同時に、宗教的思想とも密接に関連しているのである。

第一章 トルストイの經濟思想

トルストイの前半生は、専ら、小説であつた。そこでも、既に、上流社会の生活を輕蔑し、その馬鹿らしさを感じる思想が、現われていた。だが、それよりもっと強いのは、肉體労働の尊さを感じる思想であつた。これは、アンナ・カレーニナのレヴィンが、彼の労働者に伍して、共に、彼の牧場の草を刈る場面に、よく出ている。しかし、そこでは、まだ、社会問題の理論にまでは達していなかった。

然かるに、一八八五年に、六十五才の *Timothée Bondareff* という老農夫の書いた原稿を、知った。この手稿の

出版は、検閲で禁止されていたが、これはしかし、トルストイに、深甚な影響を与えた。その結果、トルストイは、二つの小著を書き、これがフランス語に翻訳された。その一つは『何をするか Que faire?』であり、他は『生活 La Vie』である。この二著は、ボンダレッフの思想に、直接、刺激されたものである。

一八八八年、この時は、検閲をパスして、トルストイ自ら、ボンダレッフの手稿を出版した。それにはトルストイの序文を冠し、フランス語に訳された。かくして吾々は、トルストイの師匠たるこの老農夫の思想を、知ることができ。まずボンダレッフから始める。

ボンダレッフが彼の信ずる全学説を建てたのは、福音書ではなく、創世紀の最初の数章に依り基づくものであった。彼はいう。「神は、人間に、二つの原始の法を授けた。この二つの法を厳正に守れば、個人および種族の幸福を授けられるが、それを破れば、個人および種族の不幸と絶滅が来る」と。第一の法とは、男子に与えられたもので、「汝の額に汗して汝のパンを食べよ」であり、ボンダレッフは、それを強めて、「汝の額に汗してパンをこねよ」と書き直した。これが個人のライフの条件だといいます。第二の法は、女子に与えられたもので、「汝は苦しみの中に産め」という事で、これが、種族のライフの条件だとします。

即ち、人間を造る。その人間を養うためのパンを作る。これが、ボンダレッフの人間生活の公式であり、地上における人類の役目であり、真の機能である、ということです。この二つの命令を厳守すれば、男も女も、平和と幸福を得たものを、人間は、特に男は、——女より悪く——この命令を、免れようとしてきた。近來は、その善かった女までが、文明国では、子を産む義務を免れようとする。(ボンダレッフは、専ら、男性を対象とし、女子については殆んどふれない)

人間は、数千年の間、「汝の額に汗して汝のパンをこねよ」の法を免れるために、奴隸制を發明して、行つてき

た。奴隸制は、人類の最初期に、既に出現したもので、ロシアでは、最近まで続いた。この奴隸制の目的と起原は、一つに専ら、人間が神の命を逃げて、自分でなく他人によって、己れのパンをこねさせようという欲心からである。奴隸は廃止された。しかし、それより先、つとに、狡猾な人間は、神の命を免れんがため、奴隸よりもっと巧妙な方法を、發明した。即ち貨幣である。マネーは、ボンダレッフ及びトルストイの學說に於ては、一種特別な、奇妙な役目をしている。

フランスの中学校の下級学年では、*exemptions* (免課賞) というホウ美が行われている。賞状には、善い行いがあれば、その度合に応じて、十行賞、五十行賞、百行賞、千行賞、と書いてある。後で悪い行いがあると、その免責の償い分として、この善行賞で支払って、決済する。余る者もあり、足りない者も出てくる。旧教の、昔の免罪符的な役をする。例えば、ある罰として、百行分の詩を作る宿題を課せられると、その償いに、百行賞一枚を出して、罰を免れる。生徒の中には、善行を積む一方で、百万行長者もいる。

ボンダレッフとトルストイにとっては、マネーは、この世では、この免課賞と同じ役をする。硬貨や銀行券は、金持ち、富者の懷中にある労働引換券 (*bon*) であつて、これと引換に、富者は、神が万人に課した罪の罰、即ち日々の労働、パンのための労働を、免れるのである。富者とは何か。それは、働かぬ人、働くことを免れ得る人の謂。彼はパンを食わぬのか。ノー、彼は、パンを食ひ、その他沢山のうまい物を食うのである。一人の富者が一日に或是一年に消費する所は、幾千の労働日に相当する。このばう大な労働に対して、富者は、物で、実物で支払って、その決済をするを要せず。彼は、百フラン、千フランの札の形で、その対価を出して免れる。

トルストイは、それを、大いなる不徳義だと見る。彼はいう。「労働階級の 9/10 の生活は、日夜益々困難になり、

不自由勝ちになるのに、吾々の階級の、即ち無為有閑人の生活は、その目的に向けられる芸術や科学の協力のお蔭で、毎年、益々快適に魅力を増し、かつ益々安全に保障されるようになっていく。吾々の階級は、昔の物語りの夢が実現する程度にまで、達した、即ち、永久不易のループル(マナー)を持つ人の状態に、達したのである。神の労働の法から免れるばかりでなく、子孫に、大量のループルの入った財布を伝えることができるのだ」と。

そういう眼で見ると、マナーの rôle は、道德の観点からは、それをジャスチファイするのは仲々むずかしい。トルストイの見る所のマナーのロールは、学校の免課賞(免労賞)よりも、また中世キリスト教の免罪符よりも、もっともっと不道德なものと、彼には、思われたのである。その理由はこうである。私が私の免課賞を払った場合には、私は、罰課を免れて、しないで済むが、しかし、私の代りに、私に代って、それをする者はない。然るに、もし私の代りに、誰か同級生の一人が、それをせねばならぬとしたら、その場合には、この制度は、憎むべきものとなる。

さて、ボンダレフとトルストイにとっては、マナーのロールは、正にそれであったのである。日々のパンの労働は、したり或はしないで止めたりできる学校の罰課の如きものではなく、誰かによって、必ずどんな事をしてでも為されねばならぬ務めである。私の食う物は、何一つも天から降ってはこない。吾々は、もう、マンナ(イスラエルの民が天から与えられた食物)

の時代にはいない。一切の物は——食物は他の物と同じく——誰かの人の額に汗して、必ず作る可きである。もしそれが、私の額に汗してでなければ、私がすることを免れた、その務めをせねばならぬ誰か他の人が、自分の額に汗して作る可きである。即ち、それをする者が奴隷であり、またトルストイの考えでは、それは、マナーのする役目である。金持、富者は、かようにして、労働を免れる。この有様は、恰かもナポレオン三世時代(第二帝政)に於て、富める家庭の若者が、代人に、金を払って兵役を免れたのに、似ている。代人は、彼らの代りに兵役に服し、場合によ

つては、彼らの代りに死んだのである。トルストイは言う。

「私は何もしなかった。私は、私の年金証書をちぎり切るだけで、他には何もしないし、また将来もしないだろう。そこで、私は、マネーは労働を代表するという信念を、持つ、利札が労働を表わす！ 如何なる労働か。利札をちぎる人の労働ではなく、労働者の労働を代表するのだ。マネーは、奴隷と同じ目的と同じ結果を、持つ。目的とは、人をして、彼の欲望の満足に必要な労働から、即ち自分で労働するという自然法から、人を免れさせるといふ事である」と。

ボンダレフの言葉はもっと美しく雄弁である。即ち、「アダム——当時の人々の見方では貴人であつた——は、悪魔の忠告に従い、この世で取る事を禁じられている生命の木に、手をのばし、働かずによい暮しをしよう、と希つたが、神は、彼を、正しい道に連れ戻した。今日でも、富者はみな、アダムの如く、悪魔に教唆されて、採つて食ふことを禁じられている生命の木の方へ手を差しのべ、働かずに、他人の労働の果実を食つて生きて行こうと努める。神は、アダムに命じたのと同じ事を、彼に命ずるけれども、彼らは、神のこの命に対して無数の異議を唱える」と。その異議とは何か。第一に、当然心に浮ぶのは、「マネーは、吾々の物を買うマネーは、又はそのために吾々が労働者に払ふ所のマネーは、吾々の労働の果実である」といふ抗弁である。

トルストイは、既に、この抗議を予見して、言った。「一人はいう、おれは、今日何十行か執筆した。だからおれは、おれの額に汗して、おれのパンを食つたのだ、と。又一人はいう、おれは、今日、おれの使用人に命令して、おれのためによく仕事をするように、監視した、だからおれは、おれの額に汗して、おれのパンを食つたのだ、と。第三の人はいう、おれは、今日、くさった品物を上等品だといつて、無相の人々を、うまくだまして売つた。だからおれは、今日、おれの額に汗して、おれのパンを食つたのだ、と。」云々。

ボンダレッフは、この抗議に、二つの回答をする。第一は、「マナーを以て神の法を免れることは、許されない事である」というのである。このボンダレッフの申し立ては根拠がある。丁度、今日、世人の良心が代金を払って兵役を免れる事を許さぬ様に。

第二の回答は、「余人は別としても、とも角、金持階級について言えば、彼らの持つマナーが彼らの労働の果実を表わすというのは、うそだ。そのマナーは、彼らの労働者の労働の果実を、表わすにすぎない。例えば、一人の富める大地主があり、彼のパンを買い、その代金として、マナーの一片を払う。彼はいう、私を責める理由がありますか。私は、自分で、このマナーを儲けたのですよ、と。どうしてそれを儲けましたか。私のブドウ酒や小麦を売ってです。誰がそのブドウ酒や麦を作りましたか。私の使うブドウ作りや作男の労働がです、と。それなら、お前に、その労働を免れさせてくれるそのマナーは、実は、お前の労働を表わすものでなくて、それは、他人の労働の果実である。ボンダレッフは結んで言う、お前の食うパンは、実は、おれたちのからだ其物なのだ。お前の飲むブドウ酒は、実は、おれたちの血なのだ」と。

これが今日の社会問題なるものである。老いたる百姓ボンダレッフは、この言葉を知らず、トルストイも、この言葉を殆んど用いなかった。さて、どうしたらよいのか。《que faire》とは、トルストイの作物の題名であった。

トルストイもボンダレッフも、この事の悪たる事については、意見が一致している。その治療については、やや違うが、しかし、程度の差だけのことであった。

ボンダレッフの解決は、土の労働以外には何物も見ない農夫のそれ、であった。土の労働——彼は、それを、パンの労働と言った。彼にとっては、聖書の創世紀の命令に厳しく一致するという事に於てのみ、救いが得られるのであ

る。即ち、「汝の額に汗して汝のパンをこねよ」である。他の如何なる労働も、このパンの労働の代りをせぬ。他のいろいろの労働も、尊く、役には立つ、だが、凡ては、パンの労働あつての事で、その後の事だ、と。（ジードは、ここで、長バンの労働をいかに苦んだかを、彼自らの言葉を引いて、見せる）

トルストイの思想は、ボンダレフ程に狭いものではない。ボンダレフが創世紀の命令を文字通り採ったのちがい、トルストイは、福音書の命令を、文字通りとる。

トルストイにとっては、ライフの原理たり又救いたるものは、愛であつた。愛は則ち元であり、労働は、愛の結果であり、必然の帰結であり、系である。だが、愛の結果といつても、強制される結果であり、必ず為さむばならぬ結果であり、しかも何らかの労働という漠然たるものではなくて、具体的な肉体労働・手足の労働である。この肉体労働のみが愛の法の要求に叶う。従つて、富裕階級が名づけて労働だ、自由職業だ、知的勤労だ、というものは（トルストイ自ら長い年月を捧げた仕事の如きさえも）、彼にとっては、神の法、即ち愛の法の要求に叶うには、全然、不十分だ、と見た。曰く「法律を編み、大砲を造り、ゼイ沢物を作り、或はバイオリンやピアノを奏する。それは、それで以て餓と寒さで死んで行く人々への労働奉仕とは、言えない。愛とは、そんな馬鹿げたふざけたものではない」と。

トルストイに於ては、何故手足労働が、我身の如く隣人を愛せよ、という神の掟の必然の結果なのか。手足労働の外に、貧者を救うよい方法がないからである。貧者に、吾々の収入の一部を割いて、マネーを与えるがよい。これは無効であり、弊害がある。けだし、トルストイにもボンダレフにも、マネーは、労働の免責符にすぎないから。従つて、貧者にマネーを与えるのは、彼らに労働せんでもよい免労働符を与えるわけで、即ち、彼らに、無為有閑人や寄生虫の生活をする^{こと}を、許すことになる。もっと悪いことには、トルストイにとっては、マネーは、吾々自身で

なさねばならぬ事を、他人をして、つまり不幸な人々をして、為さしめる手段にすぎない。トルストイの言葉でいうと、貧者にあてて振出された為替手形である。

トルストイの思想——マネーは貧乏根絶の効なし、況んや社会問題解決の力なきに於ておや——は、経験の証明する所である。

そこで、トルストイの苦悩が称増してきた。どうしたらよいか。que faire? 答は唯一つ。曰く、努めて労働に服する事。即ち、労働とは、狭い意味の労働のことで、他人にさせず自分でする労働、しかも専ら肉体手足労働、つまり神が人間の肉体の本性から来る要求としての欲望を充すために、換言すれば、衣食住のために、人間に課された労働に、努めて服し、守ることである。荷車をひき、金づちを持ち、織機の杼^はをもち、左官のコテを持って働くこと——手足労働、然り、手にタコのできる労働のことである。

トルストイ程に、無為有閑階級を熾烈な言葉で軽蔑した人は、稀である。トルストイの理論をできるだけ要約すると、以上の如きものである。

第二章 批判

トルストイの理論を實際に応用したとして、どんな結果になるか。富者は貧乏人の生活をしろ、というのか。召使を追出し、労働者を解雇し、商店では一物も買わず、「都の永遠の痛飲乱舞、花の宴」（トルストイの言葉）から逃れて、田舎に引退し、そこで、手ずから労働して生き、深い谷間に、彼らの金銀を投げ捨てよ——というのか。それ

がトルストイの理想なのか。正に然かり！ トルストイは、凡てこれらの結果を、承知の上である。

彼は思う——貧者に対して善事を行なう唯一の道は、彼らの如くに働き、彼らと同じ生活をなし、彼らの如く吾が身のパンを入手すること、そのみである。彼は言う。「富者は、わが手を以て木を切り、暖をとり、己が食事を自らつくり、わが靴をみがき、身体を洗う水はわが手で運び、汚れた水は自分で外へ持つて出て捨てる可きだ。一言に、他人の労働を、自分のために使わず、従つて、凡て何事も、できる限り自分自身とする」と。

現状において、なぜ富者が貧者を有効に助ける事が出来ないかというに、彼らが、貧乏人から遠く離れているからである。今日の社会機構——衣食住も教育も習慣も——は、貧乏人から遠ざかるように、貧乏人を遠ざけるように、組立てられている。トルストイはいう。「どんな金持でも、如何に強慾冷血でも、もし周りに彼を見ている貧乏人が居たら、食事に五皿六皿も取りはせん、彼は遠慮する、でないと毒を盛られるだろう。吾々が貧乏人と共に、近くに生活するその日より、人間の尊敬の念から、彼らと殆んど同じ生活をすることを、余儀なくされる。然かる時は、吾々は、吾々の富の用法なく、従つて、富を取得する関心もなくなるだろう。何故なら、富があつたとて、それで何するものか。白い手をして、上品で、ピツタリ身に合つた着物では、地を耕すわけにはいかぬ」と。

さて、一般に世人の考える所では、トルストイのこんな思想は、笑われるだろうし、むしろアンチソシアルとさえ言われるだろう。普通の考えでは、マネー、富者のマネーは、トルストイの思う所とは反対に、貧者を生活させる役目をする。神は、富者も貧者も、相互的に、お互のために、造り給うたと見える。貧者は、富者のために働くのを、怒らない、彼らは、力の強制で働くのではない。もし富者が全部田舎へ行つてしまつて、自分の手で作つた黒パンを食ひ、野菜を食ひ、妻の手織の服しか着ず、自ら手縫いした靴しか用いず（トルストイの如く）としたら、労働階級幾百千万の

人々は、仕事がなくて、どうなるか。また、地主が自分で地を耕すその日から、田舎の労働者はすることがなくなつて、どうなるか。即ち、富者が、労働の法に、ことにパンの労働に従わんとする日から、幾千幾万の貧者は、全く労働を奪われ、従つて又パンを奪われるという結果になる。即ち、金持ちが、貧乏人への愛のために、自ら生活上の一切の物に不自由を忍ぶことになる日から、貧乏人は、金持以上に、不自由を余儀なくさせられ、餓死してしまうだろう。私の聴衆の多くは、また経済学者の多くは、トルストイの所説を、以上のように批判する。私の見方はちがう。私は、この抗議には、大して感服はしない。トルストイははっきり言っていないが、私の想像では、その点は、実際には、次の様に経過すると思われる。つまり富者は、全部が全部、同時に一ち時に、改宗することはなく、一人一人ずつ、少しずつ、新生活に入るだろう。一人の富者が田舎へ行つて新生活を始める度毎に、今まで彼の暮し振りと支出によつて、彼が生活させてきた労働者の中若干は、失業し、都会を去つて自分の田舎へ戻らざるをえない。かくして最後の金持が、恐らく一世紀後、既に人の去つて枯野となつた旧い都会を逃げ出す日、最後の貧者も亦、都会を去つて土に帰る。

然るとき、トルストイの夢みた進化は完成する。進化といつても、よく考えてみると、これは過去にあった田舎より都会への移動——都市への集中——の、逆の、後戻りに他ならぬ。現在都市に充滿する労働人口は、どうして都会へ来たのか。金持が最初少しずつそこへ来て定着し、そこで、彼らのマネーを使うようになったので、この金持に引きつけられて、彼らは、田舎を捨ててやつて来たのだ。だから、金持が残らずみな、田舎の地に帰る日には、今迄の逆の方向に、同じ事が起る。

そうなると、田舎は、人間過剰、住む場所も、仕事（労働）もない——と言つてはならぬ。廿世紀の工業的封建制

が、ただ、十二世紀の農村的封建制に変わっただけの事だ、と言つてはならぬ。そう思つたら、トルストイの理論を了解してはいないのだ。富者が地に帰るのは、封建諸侯として田舎に住むためではなくて、彼自ら、我が土地を耕作して暮すためである。そうすれば、大地主——小作人や農労働者を雇使して作らす大地主は、不可能になる。自分の手、或は家族共々でも、五、六ヘクタール以上作ることは出来ない。大地主は、彼の土地を、放棄せざるをえない。誰に渡すか。むろん、今迄都市にいた元の労働者や元の召使などに渡す。彼らは、今後、パンの労働者として——今迄のように、工場の雇主、都市の無為有閑人のためではなく——彼ら自身のために、働くことになる。そこで、予言者の言つた時代、「各々がブドウと己がイチジクの樹の下にこう」時代が、実現する。だから、トルストイの夢は不可能とは言えない。一言に約すれば、それは、吾々が今までもつてきたのとは全くちがう世界観であり、幸福観である——というだけの事である。これがジードの見る所である。

世人一般の見る、もう一つの重大な抗議がある、即ち、大都市の死滅である。この田園的精神、百姓の生活——そんな新社会組織が普及すれば、近代都市の温室の雰囲気においてのみ栄え得た花、芸術を、文学を、科学を抹殺することになるだろう、と。

ジードの所見は別である。この異議も、私には、トルストイの理論を破る決定打とは思われぬ、という。即ち、然る場合には、この世には、芸術と天才の役目について、今迄とは別の考え方が生れてくるだろう、と見る。トルストイは、文学も芸術も哲学も科学も、専ら、民衆の爲めに、民衆の魂の爲めに、それを対象としてのみあるもの、と考える。この民衆こそ唯一の源泉であり、そこから、文学も芸術も哲学も科学も生れ出で、そして若返りのために、そこで、絶えず鍛え直しせねばならぬ、とする。彼の考えでは、芸術も詩も科学も、彼にとって、彼の世界に於て、

彼の世界觀の裡に、完全にその所を得るのであり、その眞の所を見出すのである、とする。即ち、トルストイにとつては、眞の詩人とは、ギリシャの吟遊詩人であり、道を行き、辻々に立ち、戸口から戸口へと神の叙事詩を口ずさみ、やがてそれがホーマーのイリアードとなりオデッセイとなるその詩人である。トルストイ彼自らも、半生の大小説を見限つて、晩年には、大衆向のコントだけ書いた。彼にとっては、眞の芸術家は、美術館も、サロンも、広場の大理石の胸像も、円柱も要らぬのだ。眞の芸術家とは、茅ぶき家の居間を飾るために、聖者の像を木片に彫る人であり、百姓は、それに向つてひざまずく。眞の哲學者とは、眞の知者學者とは、シャカ、孔子、キリストであり、彼らはみな、民衆の魂と、常にかつ密に、とけ合つて暮した。

トルストイの美しいビジョンは、しかし、美しい夢であり、ユトピアである。彼の考えは、創世紀の單純に帰れ、というのである。彼が、吾々に、家長的農牧生活に帰れ、人間が皆同じ生活を営み、同じ務めをなし、同じレベル内に、彼らの欲望をとり込めるといふホモジニアスで無定形の社会の状態に帰れ——これこそ彼の理論の基礎である——と、吾々に勤めるのは、吾々に、子供に戻れというが如くに、不可能を求めるものである。吾々はそうなりたいが、出来ないのだ。

そのような禁欲主義は新しいものではない。禁欲主義は、科学の教える所に反するのみか、福音書の教えにも反する。即ち、欲望の禁断、万人生活条件の一律という禁欲主義は、結局、人類の貧困化、生活内容の低下に陥る。反対に吾々は、個人も社会も、エネルギーの可能な極限を、出さねばならぬ。然かる場合に、トルストイにとって大事な民衆の魂は、大きくなり、光を増してくるのである。

社会的・職業的分業のある方が望ましい。人はみな、或者は地を耕し、或者は工人となり、或者は商人となる。学

者も出、芸術家も出、雄弁家も出る。無為有閑人——トルストイ流の——も出よ。自然が人類各人に授けた様々の才能に応じて、人生色々の花が咲け。

現代社会の悪は、或者が靴直しであり、或者が画家である所に存するのではない。悪は、皮をぬい、靴を造ることしか出来ない者が、絵筆をとり、他方、大理石からミロのヴィーナスを創り出す才を持つて生れた人が、皮ぬい針をつきさして暮して死ぬ所に、ある。トルストイが本を書くよりも靴を造った方が、この世の彼の役目を、より良く果し得たといえるか。彼は、村の羊の番をしたいと申し出たが、いつも朝おそく起きてくるので、羊飼いのむちを返してくれ、と村人に言われた。万人がみなアンナ・カレーニナを書けるわけではなく、万人が羊の番をできるものでもない。故に、トルストイの経済理論に於ては、憤慨した抗議——雄弁な言葉と彼らの生活行動とを以て示した、現代社会秩序の不正に対する強い反抗——吾々が長い習慣で眼をつぶっている所の、社会組織の不正義に対する抗議——それ以上のものを、見る可きではない。

最後に、私は、二つの事実を強調したい。それは、トルストイの想像力を最も力強く動かした事実であり、彼の凡ての学説の基盤とも元ともなる所のもので、私には、注意に値すると思われる。

第一は、現代社会において、手足労働の占める地位が低いという事実である。人は口でこそはいろいろお体裁のいい事をいうが、では、あなたはあなたの息子の嫁に労働者の娘をもらいますか、或は娘を労働者の嫁にやりますか、ときいたら、誰でも「No」だ。人は、宴席に、靴直しや土方を招待しないものだ。

そうしてみると、社会問題を起すのは、富の不平等——人はそう信ずるけれども——ではなく、むしろ習慣、生活

状態のちがひ、社会的地位の差である。

私は確信する。社会問題は、手足労働がその名誉を回復する日、板にカンナをかけ、鉄を鍛えるのも、銀行の札勘定も、タイピストも、サインする課長も、頭の労働と、誇る労働と、同じ様に尊敬すべきものだ、と考えられる日に、初めて、本当に解決される、と。

今日、既に、手足労働の多くは、会社や銀行や役所の事務員よりも、一般サラリーマンや教師などよりも、給料が多い。アメリカやオーストラリアでは、手に一技一能ある者は、大学出のバチエラーよりも、給料も多く、世の尊敬も比較にならぬ程高い。労働時間の短縮、教育の普及は、労働階級の社会的地位を高め、彼らが皆学校出となるから、自由職業的領域の過剰人口を一層激化し、ついには、大学出は、今日なお幾分か残る世の尊敬をふり棄てて、手にカンナをとり、鋤クワをとるに至らしめられる。ついにここで、トルストイの夢が一部実現する日がくる。

第二の事実。それは、現代において、マネーの占める、余りに行き過ぎた役割であり、それが、トルストイの憤慨を招いたのも、当然である。手足労働の低い地位とマネーの高い役割とは、相対応するものであり、連带的である。これは、ゾラの小説を見れば、一目で分明である。しかし、これは変つて来る。第一に、貨幣の価値、購買力は漸減する。第二に、利率は低下の傾向にある。従つて、金持の金が定額固定とすれば、質銀は上騰して行くから、金持の人間支配力、人間購買力は漸減する。

マネーの力は漸減する一方、労働——殊に手足労働——の力、価値は、絶えず漸増する。これは宜い事だ。吾々は、この経済的進歩を、極力促進すべきだ。

むろん、マネーは、労働して得、それを節約貯蓄した結果であるならば、大いに尊敬すべきであり、攻撃すべきで

なく、必要あれば、防衛すべきだ。然かる場合、マナーは労働の免課符——トルストイの信するように——ではなく、労働の果実たること疑いない。

だが、それは、枝から採って久しく経た干からびた果実、即ち過去の労働の果実であつて、それが銀行券、紙幣、年金証券の形に於て投資された場合には、人間のからだ（身体）の中に生き動いている現在の労働とは、同じ権利、同じ尊厳がある、と威張るわけにはいかない。キャピタリストはこの事を知るべきである。そして、もし彼が賢明であるならば、己れ自ら——それが社会問題を平和に解決する最良最善の方法である——自分から、彼の力を抑制することを、承諾すべきである。政権の日日衰退するを見てとる君主は、自から、わが退位を準備し、逐日強大となる新興勢力——労働——の面前に於て、メランコリでなく、歎喜を以て、先驅者キリストの言葉「私はちじまり、彼は伸びる可きだ」を、繰返す可きである。然かり、「労働は大きくなり、マナーは小さくなる可きだ」。

何人も、トルストイ以上にこの真実を描いた者はない。如何なる人も、読者の魂の中に、彼以上にこの真実をたたき込んだ者は居らぬ。これあるが故に、トルストイも亦、先驅者の仲間に入るであらう。千里眼の列に伍するであらう。一言に約せば、天才の直観か或は狂人の直観を以て、将来を見抜き、読み透し得た人の列に入るのである。

これでジードの文は終ります。私は、原文を省いた所（主に宗教的な事柄）もありますが、大体八、九分通りは取つて、お話ししましたのです。あと一、二分、時間を頂いて、補足したい事があります。一九一九年五月十七日、私の東大を卒業する、大正八年で、試験中でしたが、散歩して丸善で買ってきたのが、小さい本で、*Sayings of Tolstoy* といふのでした。トルストイのいろいろの作物から抜きとった名句、名言集でありまして、それが、一年三百六十五日に分けて、一日一句ずつ出ているのです。その中から、吾々に興味のある若干を拾ってみますと、「勞して働く生

活という理想の代りに、人間どもは、無尽蔵の財布という理想を案出した」(七月二〇日の分)。これは、今日只今お話を致しました所と、ピッタリ同じ事を言っておるのです。「貧乏の原因は富者である」(七月一五日)。「経済学なるものはイカサマ物 sham だ」(七月二九日)。「人の真(マコト)の幸福は、ただ、神の意志を達成する事のみに在る」(一月二六日)。「人の目的が彼一身のみの幸福にある間は、現在の社会組織に優るものは、あり得ない」(五月二三日)。「愛の能力を授けた、合理的な生物たる人間にとって、社会問題の唯一無二の解決方法は、力を廃止し、相互の尊敬と合理的プリンスブルに基づく社会を、組織する事に在る」(五月九日)。「諸国民(nations)が社会主義の必要を承認するまでは、この制度は、彼らによって試みれるものでない」(五月二〇日)。「現在では、革命と政府の倒壊とは、全然、不可能だ」(四月二七日)。トルストイの死は一九一〇、革命は一九一七年でした。死んで四年たたぬ間に、戦争が起きたのです。